

平成22年度 シラバス	学年・期間・区分	3年次・前期・A群
	対象学科・専攻	電気電子工学科
電磁気学 (Electromagnetism)	担当教員	楠原 良人 (Kusuhara, Yoshito)
	教員室	電気電子工学科棟3階 (tel 42-9072)
	E-Mail	y-kusuha@kagoshima-ct.ac.jp
教育形態 / 単位の種別 / 単位数	講義 / 履修単位 / 1単位	
週あたりの学習時間と回数	授業 (100分) × 15回	
<p>〔本科目の目標〕ベクトル解析等の高度な数学表現は用いず、力線概念とそのベクトルによる表現、及び球体、円筒など簡単な図形モデルから電磁気学理論における基本的考え方を修得することを第1の目標とする。最終的には、実用に関する様々なモデルにおける電界、電位の計算能力の獲得を目指す。</p>		
<p>〔本科目の位置付け〕物理学の中の1大体系であるとともに電気・電子工学の基礎理論であり、様々な電気・電子現象を理解し、さらに新たな技術を構築していく場合に土台となる「考え方」と知識である。本講義と後期の電磁気学、および4年電磁気学までで、電磁気学の一通りの分野を修得する。</p>		
<p>〔学習上の留意点〕ベクトルの意味、その数値的取り扱い、空間的関係の把握など、数式ではなく物体と力線の性質を理解することが大事である。そして単に数式を記憶するのではなく、モデルから数式を導き出す力を養うことを重視する。微分・積分を使いこなせるようになること、特に積分の計算力が求められる。授業ごとに最低30分の復習と、自分で演習問題を解くことが絶対に必要である。</p>		
〔授業の内容〕		
授 業 項 目	時限数	授 業 項 目 に 対 す る 達 成 目 標
1. 電荷によるクーロンの法則	3	金属、絶縁体の帯電の原理、電子の構造と電子、陽子の存在を理解できる。 導体における静電誘導と絶縁体における分極の生じる機構を理解できる。 クーロンの法則を理解し、クーロン力を向きを考慮して計算できる。
2. 電界のガウスの法則	6	近接作用説、場の考え方、電気力線の概要を理解できる。 閉曲面から出て行く電気力線の総数と電界の関係を理解できる。 面積分概念を理解できる。 点電荷、帯電球、帯電円筒、平行平板における電界を導出できる。 二重帯電球、空間に電荷が分布する場合の電界を導出できる。
3. 電界と電位	6	仕事の概念と電位の定義を理解できる。 点電荷の電位を計算でき、クーロンポテンシャルの重ね合わせを理解できる。 電位の偏微分と「傾き」の意味を理解できる。
--- 前期中間試験 ---	2	授業項目1～3について達成度を確認する。
4. 帯電体、導体における電界と電位	8	「帯電導体」の性質を理解できる。接地(アース)の考え方を理解できる。 球内、円筒内に電荷が分布する場合の電位を導出できる。 直線状の分布電荷、円盤状の分布電荷による電界と電位を導出できる。
5. 電気双極子	2	電気双極子の概念を理解できる。 極座標による近似と電位、電界を算出できる。
6. 電気映像法	3	点電荷に働く力と導体面に誘起される電荷を導出できる。 非接地導体球に誘起される映像電荷の考え方を理解できる。 接地導体球に誘起される映像電荷の考え方を理解できる。
--- 前期期末試験 ---		授業項目4～6について達成度を確認する。
試験答案の返却・解説		各試験において間違った部分を理解出来る。
〔教科書〕安立三郎、大貫繁雄「電磁気学」、森北出版		
〔参考書・補助教材〕松原三人、坂口浩一、山田博章 共著 「工科系の電磁気学」、コロナ社		
〔成績評価の基準〕中間試験及び期末試験(70%) + レポート・宿題等(30%) 平常点は小テスト(10数回を予定)、平常テスト及び授業中の質疑応答の評価による		
〔本科(準学士課程)の学習教育目標との関連〕3-a, 3-c		
〔教育プログラムの学習・教育目標との関連〕		
〔JABEEとの関連〕		